

本学部図書館が所蔵する貴重図書類の中に「朝香宮邸新築関係費書類一式」と題する古い建築関係文書がある。恩師山口廣名誉教授と一緒に古本屋の古書目録の中から見つけて購入した貴重図書である。簿冊は全部で23冊に分かれている。今では珍しくなった和綴じの体裁で、その中には古い建築の書類や青焼き図面などが含まれている。書籍を購入できたのは今から30年ほど前のこと、ちょうど日本がバブルを迎えていた時代であった。

当時は実験機材・備品類を必要としない建築史研究では、余った年度末予算の一部を使って古本を購入する権利が託されていた。日本が財源不足に悩んでいる今では羨むような時代の話である。古本の値段は当時の金額でたったの40万円であったように覚えている。

古本が高値で取引されるようになったのは両国の江戸東京博物館がその開設準備を始めた昭和60年頃からである。書籍を購入できたのはまさしくそうした時期であり、当時は「東京」という名前が付いた本であれば何でも売れる時代であった。だから販売者もろくに価値を調べずに、本に値段を付けたのであろう。今にして思えば“お宝発見!”と同じくらいに安い買い物であったように思う。

ちなみに旧朝香宮邸は現在の東京都庭園美術館である。この建物は久邇宮朝彦親王の第8皇子鳩彦王によって「朝香宮白金殿邸」として昭和8年5月に完成させられた住宅である。その建築のデザインはすべてアールデコの装飾で覆われており、すでに「アールデコの館」として知られていた。

朝香宮家は明治39年に明治天皇の特旨のよって創設された宮家のひとつである。宮家の創設時期には2つのピークがあり、ひとつは皇室を確かなものにするため明治維新を契機とするもの、もうひとつは明治体制の完成・継承を踏まえて明治天皇の特旨で創設された宮家である。後者はいずれも設立が明治後期に集中し、明治天皇の娘（内親王）を御後に迎えている。第8皇女の允子妃殿下を御後に迎えた朝香宮家では、このとき鳩彦王はまだ陸軍大学校に学ぶ学生であった。鳩彦殿下は結婚して大正3年に大学校を卒業するとそのまま残って陸軍中佐

となり、大正11年10月には「軍事御研究」を名目としてそのままパリへ旅立った。上海— シンガポール— ペナン— コロンボ— スエズ運河— ポートサイト— マルセイユを経てたどり着いたフランス旅行であった。

その翌年に鳩彦殿下にちょっとした事件に巻き込まれる。4月に北白川宮ご夫妻と一緒に出かけたドライブでパリ郊外において自動車事故に遭い、怪我のため長期療養で此地にしばらく留まることになったのである。允子妃殿下も急きょ看病のためパリに駆け付けた。このとき二人で一緒に見学したのが1925年（大正14）にパリで開催されていたアールデコ博覧会であった。このアールデコは正式名称を「現代装飾美術・産業美術国際博覧会〈Exposition Internationale des Arts D'ecoratifs et Industriels Moderns〉」と言う。新時代の産業芸術・工芸美術を目的とした装飾博覧会で世界中から多くの見学者が訪れた。世界的な建築家であるル・コルビュジェ（1887—1965）はこの展覧会で、将来的な無装飾デザインの方向性を見据え、インターナショナル・スタイルによる「エスプリ・ヌーボー館」を展示してアンチ・テーゼを唱えた話は有名である。しかし、鳩彦殿下が関心を抱いたのはコルビュジェよりもアールデコ様式であった。鳩彦殿下は同年12月に帰国し、しばらく高輪本邸で生活を営んだ。しかし、関東大震災でそれが被害を受け、白金に新しく本邸（旧朝香宮邸）を新築することになったのである。この建物はご存知である人も多いと思うが、アールデコ様式が採用されている。鳩彦殿下が如何にこの様式にご執心だったのかが見て取れるのである。建物は宮内庁関係を手掛ける宮内省内匠寮工務課建築係が担当した。この書籍によれば、具体的にはパリで見学を済ませていた権藤要吉技師が設計を担当し、プロジェクトにはアールデコ作家として世界中に知れ渡っていたアンリ・ラパン（1873—1939）が内装デザインに参加していたことが記録されている。さらにルネ・ラリック（1860—1945）もシャンデリアのデザインを担当し、国際的な規模で実施された住宅プロジェクトであったのである。

ちなみにこの書籍を購入した当時は、そこまで大きな

プロジェクトであることをつゆ知る由もなかった。日本建築学会編『日本近代建築総覧』(1980)にはリストに「白金迎賓館(旧朝香宮邸)」の名前があるものの、書籍とリストの建物が同一であることさえはっきり判らない状態であった。書籍の中に「Henri Rapin」のサインを発見しても“へえー”と思うだけ・それだけで終わっていた。それが建築史家・藤森照信教授(現・工学院大)が研究室を訪問してから状況が一変した。旧朝香宮邸を美術館に変更する話と引き換えに、古本屋から書籍の在りかを聞きつけて研究室に調べに来たのである。藤森教授曰く、旧朝香宮邸の建築関係文書は2種類あり、そのうち1種類は本学部が所蔵する旧朝香宮家の正本とのこと。(副本は宮内庁内匠寮が所蔵する『新築工事録』全11冊)その後、東京都文化財審議委員を務めていた坂本勝比古名誉教授(神戸芸術工科大学)も訪れて、書籍を巡る周囲がにわかに騒がしくなっていた。朝香宮家は軍事の関係で昭和22年に皇籍を離脱し白金を離れ、建物は旧首相官邸となり、さらに公賓などの迎賓館にも使用され

ていた。しかし、昭和50年から空き家が続き、昭和59年に鳩彦殿下(行年93歳)が逝去されたのを機に東京都が購入し、都の庭園美術館として活用する話が持ち上がっていたのである。書籍を購入したのはちょうどその時期であった。わずかタッチの差で東京都から幸運を洩う結果となったのである。ちなみに書籍は本研究室がしばらく保管して研究資料に使っていたが、筆者がイギリス行きするのを機に図書館へ返却、現在は貴重図書してロッカーの中でただ眠っている。この原稿を書くため、書籍を再び見せて欲しいと申し込んだところ、図書課長自らが自慢げに恭しくロッカーを開け、包んでいた包装紙をひも解いてくれた。しかし、書籍については未だに目録が準備されていない状態であった。ときどき庭園美術館から届く招待チケットと引き換えに、展示資料としてそれを貸し出し、社会に役立てる活用の途を開いているとも聞いている。しかし、本当はそろそろ学内で貴重図書を役立てるための公開と保存を考える時期が来ているのかも知れない。

